I am Jazz!（ジャズ・スーパー列伝）

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.8

Wes Montgomery【ウエス・モンゴメリー】

～ジャズ史に燦然と輝く偉大なギタリスト～

写真提供：ユニバーサルミュージック

Profile

1923 年 3 月 6 日米インディアナ州インディアナポリスに 4 男 1 女の三男（長男は若くして死去）として生まれる。本名は John Leslie Montgomery。兄のモンクはベース奏者、弟のバディもピアノ、ヴァイブ奏者として活躍（妹のアーヴェナは教会でピアノを弾いていた）。12 歳の時に兄モンクから 4 弦のテナー・ギターをプレゼントされ音楽に興味を持つ。19 歳の時にチャーリー・クリスチャンの「ソロ・フライト」を聴き本格的にギターを始める。1948 年にライオネル・ハンプトンがインディアナポリスを訪れた際にバンド・メンバーの募集を行い、譜面が読めないにもかかわらず見事合格しバンドに参加。1 年半ほどで退団（家族と離れ離れになるのが嫌で、おまけに飛行機嫌いであった為とも言われる）するが、その後は働きながら演奏活動を続け、兄モンクと弟バディとの“モンゴメリー・ブラザーズ”や“マスター・サウンズ”で活動を行うなど、長い間地元で地道な活動を続けることとなるが、その間に独自の奏法を完成させる。1959 年、地元のクラブで演奏中にリヴァーサイド・レコードで新人発掘の役割を担っていたキャノンボール・アダレイの目に止まり、キャノンボールがプロデューサーのオリン・キープニュースに録音を進言し、同年初リーダー作『ウエス・モンゴメリー・トリオ』を録音。そして、翌 60 年に発売した『インクレディブル・ジャズ・ギター』で一躍ジャズ・シーンのメイン・ストリームに躍り出る。以降もシングル・トーンによるソロに、独自のオクターブ奏法やフィンガリング（親指奏法）をミックスしたプレイで、ジャズ・ギターに革命をもたらすと共に、リヴァーサイド～ヴァーヴ～ A&M レコードで数々の名盤を残す。1968 年 6 月 15 日、心臓麻痺のためインディアナポリスで死去。享年 45 歳。

WM's Great Album

他にも、『フル・ハウス』『ボス・ギター』『インクレディブル・ジャズ・ギター』『ソー・マッチ・ギター！』をはじめ、数々の名盤・名演を残しているウエス。どうか自分にとっての愛聴盤を見つけて欲しい。

ウエスの記念すべき初リーダー作！

The Wes Montgomery Trio+2
Wes Montgomery
(ビクターエンタテイメント:VICJ-41532)

Wes Montgomery (g), Melvin Rhyne (org), Paul Parker (ds)

1. 'Round Midnight 2. Yesterdays 3. The End Of A Love Affair 4. Whisper Not 5. Ecaroh 6. Satin Doll (take 7) 7. Missile Blues (take 6) 8. Too Late Now 9. Jingles 10. Satin Doll (take 5) 11. Missile Blues (take 5)

通常ならウエスの最高傑作とされる 2 作目『インクレディブル・ジャズ・ギター』を持ってくるべきかもしれないが、この初リーダー作には、地元インディアナポリスのクラブで、キャノンボール・アダレイやリヴァーサイドのプロデューサー、オリン・キープニュースが目の当たりにした信じ難きウエス・トリオの真実が収められている。トリオのメルヴィン・ライン（org）、ポール・パーカー（ds）も、1957 年にキープニュースが初めてウエスに遭遇した時のメンバーであり、偉大なる一歩を記したウエスの原点がここにある。「ミサイル・ブルース」は、ウエスが夜毎腕を磨いた地元のクラブ「ミサイル・ルーム」をテーマにした曲。録音は 1959 年。

ウエスとウィントン・ケリー・トリオの白熱のセッション

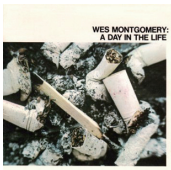
Smokin' At The Half Note
Wynton Kelly Trio-Wes Montgomery
(ユニバーサル:UCCU-5042)

Wes Montgomery (g), Wynton Kelly (p), Paul Chambers (b), Jimmy Cobb (ds)

1. No Blues 2. If You Could See Me Now 3. Unit 7 4. Four On Six 5. What's New?

長ったらしい説明は不要。とにかく一度聴いて欲しい。ウエスにウィントン・ケリー（p）、ポール・チェンバース（b）、ジミー・コブ（ds）のトリオが競演した白熱のセッションを収録した名盤。前半 2 曲は 1965 年 6 月 24 日 NY のハーフ・ノートでのライヴ録音で、後半 3 曲は 1965 年 9 月 22 日のスタジオ録音だ。ウエスの絶品のソロに鳥肌が立つ「ノー・ブルース」、哀愁漂うウィントンのピアノとウエスのギターが泣ける「イフ・ユー・クッド・シー・ミー・ナウ」など必聴の全 5 曲。尚、こちらの青盤とは収録曲や曲数が異なる赤盤の『ハーフ・ノートのウエス・モンゴメリーとウィントン・ケリー・トリオ Vol.2』も一緒に聴くのがベスト！

新たな可能性をもたらした後期ウエスの大ヒット・アルバム！



A Day In The Life
Wes Montgomery
(ユニバーサル:UCCU-5020)

Wes Montgomery (g), Herbie Hancock (p), Ron Carter (b), Grady Tate (ds), Ray Barretto, Jack Jennings, Joe Wohletz (per), etc

1. A Day In The Life 2. Watch What Happens 3. When A Man Loves A Woman 4. California Nights 5. Angel 6. Eleanor Rigby 7. Willow Weep For Me 8. Windy 9. Trust In Me 10. The Joker

クリード・テイラーが設立した A&M/CTI が放った記念すべき第 1 号のアルバム。ドン・セベスキーをアレンジャーに迎え、オーケストラをバックにウエスのギターがポップなジャズを聴かせてくれる。ピアノとベースには、当時マイルス・デイビス第二期黄金のクインテットのメンバー、ハービー・ハンコックとロン・カーターが参加。大衆的な作品ゆえ賛否両論もあるが、ウエスのギター・プレイに異論の余地はなく、その後に続くヒット・アルバム『ダウン・ヒア・オン・ザ・グラウンド』『ロード・ソング』を生むきっかけとなる。ビートルズ・ナンバー「アデイ・イン・ザ・ライフ」と「エリナー・リグビー」は必聴の価値大！　1967 年録音。

ウエスの愛器ハートのマークのギブソン

ウエスが愛用したギターで一番有名なハート形の真珠貝をはめ込んだギブソン 1963 年製 L-5C。ウエスの没後にギブソンからアニバーサリーモデルやヒストリック・コレクションとして同じハートマークが入ったモデルも発売されたが、『The Walker Vol.5』の HARU（高内春彦）さんのインタビューでも触れられているように、火事で焼失とされていた実物が、実際はボヤで塗装が燃えた程度で済み、ギブソンのカスタム・ショップでオリジナルの状態に修復され、2001 年の 8 月頃にオークションに出品される際のデモンストレーターとして HARU さんがそのウエスの愛器を弾いている。今現在、誰が所有しているのか定かではないが、ウエスの幻のギターを弾いた HARU さんの「やっぱりいい人にはいいギターが行くんだなあって思ったね」ということばが印象的だった。尚、生まれ故郷であるインディアナポリスにあるウエスのお墓の墓石にも愛器ギブソン L-5 が形取られている。そして、インディアナポリスと言えば、この “The Walker's” のタイトルの由来でもあるベースマン、リロイ・ヴィネガーの出身地でもあり、若い頃に地元インディアナポリスのクラブでウエスやモンゴメリー兄弟たちと度々共演した仲でもある。

映像で拝むウエス

ウエスのプレイを映像で見るなら、以前『JAZZ625』（DVD）と『アット・ジャズ・プリズマ ’65』（VHS）というタイトルで発売された映像のカップリング『In Europe 1965 』（輸入盤 DVD）がお薦め。前半は 1965 年 3 月 25 日、ロンドンで収録した TV 映像から 5 曲。後半は同月にベルギーのブリュッセルで収録された TV 映像から 5 曲を収録。

A Hard Day's Night

結婚後 19 歳の時にギターを始めたウエスは、30 代半ばに漸く陽の目を見るまでは、妻と 7 人の子供を養うために、地元インディアナポリスで朝 7 時頃から午後 3 時頃まで工場（牛乳配達 / ミルク工場、電機工場、板金工などの説がある）で勤務、夕方 6 時頃から深夜 2 時頃まで「ターフ・バー」でレギュラー演奏をした後、更にアフター・アワーズに「ミサイル・ルーム」というクラブで夜毎セッションに参加するという超人的な生活サイクルを繰り返していた。結果的に心臓麻痺により 45 歳の若さで生涯を終えたウエスだが、家庭を顧みず酒やドラッグに溺れ若くして命を落とすジャズ・ミュージシャンが多かった中、家族思いのウエスの男気には感銘を受ける。